



【表紙】

幼い貴族の肖像

ニコラ・ド・ラルジリエール

解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

青少年芸術劇場(バレエ)に同行して
 … 福田 一平 4

青少年への芸術啓蒙の意味
 … 藤田 洋 6

随想

過去の遺産、未来への遺産…伊藤 延男 8

報告

アール・ヌーヴォー期のガラスと陶磁器
 … 福永 重樹 10

ジャパンハウス・ギャラリーの法隆寺展
 … 倉田 文作 13

文化庁ニュース

文化庁の昭和57年度概算要求まとまる……………15

第15回現代美術選抜展……………17

昭和56年度都道府県宗教法人事務担当職員
 研修会の開催……………17

昭和56年度文化庁派遣芸術家在外研修員を決定
 ……………18

昭和56年度(第36回)芸術祭協賛公演決まる…………21

展覧会

正倉院宝物 24

エミール・ノルデ展 25

瓦 経 26

モーリス・ドニ展 27

国語シリーズ⑥ 「漢字の読み」に関する問題 29

新設法人紹介 (財)美術文化振興協会 ……………23

(財)日本舞台芸術振興会

祭礼歳時記シリーズ⑩ 28 国立劇場ニュース 31

青少年芸術劇場(バレエ)に同行して



福田 一平

(舞踊評論家)

かつて西洋の舞踊が、我が国に移入されて間もない頃、その新振付による創作舞踊の芸術性を提唱して、故石井漢氏は地方の小学校や(旧)女学校の講堂や公民館などで公演し、日本に於ける西洋舞踊の文化普及運動を活発に行っていた。西洋の踊りといえば、まだ地方ではレビュ・ダンスとしか考えられなかった時代である。数年前、地方のある文化会合の席で、初老の婦人が、その頃観たと言ふ石井漢氏の舞踊の話から、当時文化の尖端を行くと思われる西洋の新しいダンスとは、こんなに身近な言葉を持ち、深い内容を秘めているものかと、未知のものに初めて触れた時の強い感動を忘れられない思い出と語ってくれた。

現在ではテレビの普及で、どんな地方へ行ってもバレエといえどトウ(つま先)で立って踊るヨーロッパから伝わった舞踊であること位は

周知のこと、なっているが、さてその実際の舞台を観たという人は、意外に少ないのが実情である。

八月の暑い日、文化普及課の行っている青少年芸術劇場に解説講師として同行しながら、熱心に話を聞き、舞台上興奮して拍手を送る地方都市の高校生姿を見て、この人達も十数年後には、前述の婦人のように、自分の幼い子供たちにはじめて見た「白鳥の湖」や「ジゼル」の感想を聞かせ、チャイコフスキーやプッチーニについて語る日もあることだろうと、勝手な想いを馳せたりした。

戦後、バレエやモダンダンスの隆盛は、その社会の要求に応じて目を見張るものがあるが、その殆んどが東京を中心とした大都會のみに集中している。地方都市では、いま青少年芸術劇場や子ども芸術劇場のように、本格的な全幕公

の移動公演だけに、公演が終って次の都市へ着き、夕食をとるのが十時すぎといった厳しいスケジュールを、この公演の趣旨をよく理解して協力して下さった日本バレエ協会の人達に改めて謝意を表したい。

私の同行した奈良市の文化会館の公演では、その日のプリマの岡本佳津子さんは、秀逸ともいえるオデットを踊り、コールド・バレエの人達も見事なアンサンブルで、学生達との素晴らしい交歓をみせた舞台だった。文化会館側の行きと来た動員の方法や、学生の鑑賞反応も、東京の一流劇場以上のものであったと思う。この文化普及運動が、ようやく実りあるものとなつて来たといえる。

日本のバレエは、その発展過程がヨーロッパ各国と全く異なっていて、はじめは民間の興行会社が招聘した外国人舞踊教師や、海外でバレエに接した愛好家や舞踊家によって伝えられたが、その本格的な練習技法の伝達や作品の上演は、三十数年前からとも言える。国立のバレエ学校、劇場と共に発展したフランスやソ連、また王立のバレエ団として内容を整えたイギリスやデンマーク等のバレエのように恵まれた条件は、皆無のところから出発している。一般の愛好家から生まれ、その芸術性を知った舞踊家によって広く普及され盛んになった舞台芸術である。西洋の音楽、絵画は、いち早く日本でも国

立の学校が出来て、教育の面からも、芸術としての価値が認められたが、舞踊だけは長い間野放しの状態であった。状況だけみれば、アメリカの舞踊界と非常に似ているが、アメリカでは早くから州、市又は公共団体、財団が、その芸術性を高く評価し、大きな経済援助を行って普及につとめている。

この青少年芸術劇場、子ども芸術劇場が、文化庁、各県の教育委員会と文化会館の共催で、学生を対象として出発したことは、舞踊関係者にとって本当に嬉しいことである。また地方へ呼びかける文化運動の少ない日本の現状では、広い芸術分野にわたっていることが特筆に値する好企画であるといえる。

今回の、子ども芸術劇場には同行しなかったが、二年前国際児童年の子ども芸術劇場で、アジア各国の民族芸能団を招いて公演した時の事である。日本の小学生を対象に、アジア各国の風土や生活の姿を伝え、その芸能の発生と形態を説明しながら、なごやかな文化交流を行っているのを見て爽やかな感銘を受けたことがあった。来日したタイ、フィリピン、インドネシア、マレーシアの芸能団の人々も、日本の地方都市の子供達と身近に交歓出来たことが何よりも大きな感激だと言っていたのを覚えている。

海外との文化交流といえば、外国へ公演旅行に出た時、どこの国でも公演後、現地の人達と

演を生のおケストラの演奏で観る事は不可能に近い。それだけに東京の大劇場そのまゝの一流スタッフ、キャストによる今回のような地方公演は、われわれの常識では考えられなかった事である。勿論経済的な理由もあるが、時間的にもこれだけの人間の協力を得ることは、大変に困難なことだったからでもある。

バレエのような総合芸術では、振付、舞踊、衣裳、装置、照明、それに音楽、どの一つが欠けてもその芸術的価値を高水準で保つことは出来ない。それだけに、今年の公演内容のように充実した陣容を整える迄には、当事者の大変な骨折りがあつた事と思う。舞踊界の各団体間の確執を知っているだけに、よく結果してこの仕事に当るようになったと思う。各団体が、この企画の意義に共鳴したからでもあるのだろう。当初の企画の第一条件である、現在の日本で実現出来る最高のバレエをそのまゝ、地方の小、中、高校生に鑑賞させ、いま国際語となったバレエの真の内容に触れさせる、という目的は一応達せられている様に感じ取れた。

個々の点では、ある都市の会場では舞台が狭く間口十メートル、興行五メートルのところ、「白鳥の湖」第三幕の四十数名の踊り手が演舞しなければならぬといった事もあつたが、それも演出の苦心によって本質を失うことなく見事な舞台を見せたようである。それに暑い連日

の交歓会がある。そこに集まった日本の在外駐在員や商社の人の口から「正直なところ、我々はこうした現代日本の舞台芸術や、民族舞踊に触れるのは初めてです。よく我々にも商売ばかりでなく、日本の文化や伝統芸術もPRしろと言われますが、実際にそれに接する機会は、学生時代には殆んど得られなかったといえますからね」と聞かされ、幼ない小学生時代から、自国の持つさまざまな誇りある現代芸術や伝統芸能の実体に、直接触れさせることの大事さを何時も感じていたことであつた。

この青少年芸術劇場、子ども芸術劇場で学んだ学生達が、やがて世界的に活躍する日には、自国の文化や伝統について語り、経済についての交渉にも、より深い人間的な交わりを持つことが出来るのではなからうか。いわば、これは経済優先になり勝ちだといわれている日本にとつての根づきづくりでもある。

そればかりでなく情操面からの人間づくりに大きな役割を果たしていると考えられる。地味な仕事だが、長い年月をかけても、この学生への文化普及運動の重要さを認識して、更に充実したものにして欲しいと思う。

青少年への芸術啓蒙の意味

——ことしの青少年芸術劇場に同行して——



藤田 洋

(演劇評論家)

こんど「青少年芸術劇場」の解説講師として、劇団青年座の「ブンナよ木からおりてこい」に同行して、いろいろな感想をもった。その見聞の一端を書き留めておこう。

八月二十三日は暗い日曜日であった。男鹿市は秋田から約一時間、男鹿半島の観光ルートの入口にあたる。なんの変哲もない町であった。その駅前、ほんとうに真ん前に三階建のビジネスホテルがあって、そこに泊っていたのだが、ロビーのテレビは台風十五号の通過経路を刻々と伝えていた。どうも、昼頃には甚大な影響をおよぼすようになるらしい。事実、その通りになった。

開演は一時半である。男鹿市文化会館は、海岸ぶちを埋立てた湾岸道路ぞいに、つい最近つくられた設備のいいホールである。設備はいいが、周囲には建物がいくつかの工場を除いてはまるでない。ということは、雨や風がまともに

ぶつかってくる。台風でもこようものなら最悪の場所だ。タクシーで会場に乗りつけたわたしは、途中、傘を畳んで歩く生徒たちに出会って一瞬気の毒とも、恥しいとも思った。

薄田勇治館長は、今日は半分ぐらいしか集まりそうもなくて、と申しわけなかつた。そういううちにも、電話がはいり。学校からバスを仕立てたが、道路が不通になって引きかえしたというのだ。こうして不参加が三校あった。友達と連れ立って歩いてくる組のほかに、家族が車で送ってくる人もいる。本来なら満員なのに、気の毒なことに空席が目立った。

「みんな楽しみにしとったのですが」といった。今年の新劇の場合、七月二十日から二十七日、八月十七日から三十日、計二十二日間で二十回公演、ほとんど連日移動する旅で、台風がきたから雨天順延とはいかない。また移動の関係で時間変更も難しい。たった一回のチャンス

「芸術」とはいえないからだ。

前日の青森市民会館も、雨のなか満員だった。北海道の江別市は、川向うが決壊して、まだ水害が治まっていなかった。この館長は、ゴム長にジャンパー姿で災害復旧に奔走しながら、観客動員にも熱心だった。その日も雨が降ってオートナは脅えていたが、生徒たちは約七割、楽しそうに見物していた。

各地方によって、関係者の熱の入れかたにも若干の気風のちがいがあつた。わたしの担当した北海道から東北の一部は、どれも熱心で誠実だった。雨が多いのが困った。これは昨年行つた九州でも同じだった。

困るのが雨と高校野球である。地元のチームが勝ちすすんで当日が試合にぶつかると、「芸術」どころではなくなる。会場はたちまちガラんとする。この事業にも泣きどころはあるのだな、と思つた。

「ブンナよ木から下りてこい」は、前には「こども芸術劇場」の巡業にも選ばれている。三年半のあいだに四百回近い上演回数を重ねている。劇団ではほかの作品が上演できなくなるから、今回の「青少年芸術劇場」で一時打切りにするといふ。

しかし、すぐれた芸術作品はそう簡単にうみ出せるものではない。新劇は、このところシェイクスピアの「ベニスの商人」(劇団四季)、ブレヒトの「コーカサスの白墨の輪」(劇団仲間)

が、天候の都合でダメになることもある。地方では中央の芸術を鑑賞する機会は、近年ほとんどなかった。三十年前までは各地に興行師がいて、映画館や劇場もあり地方巡業があつたが、ほとんど姿を消した。

「昔はここにも映画館がありました。客が入らんで閉めてしまいましたな」という市や町がいくつもある。それに代って、りっぱな市民会館や文化会館が各地につくられた。

最近、ばらまき福祉が見直されたら文化さまのお通りか、などという記事をみてこういう程度の低い論調が出ることを悲しんだ。確かに、東京にもないような設備のいい会館が、人口のさして多くない市に建てられてはいる。だが、そこで「芸術」と接することがどれほど心の糧になつていくか、計り知れないものがあるはずだ。「芸術」の精神的効用については、与えて即反応を示すものではない。目に見える数値で答えは出ないし、ましてやその人の人生に、いつ効果が出たといえるものではない。

爆弾一箇で、何百何千と殺傷したというのなら答えが出る。文化は、答えが出ないのである。答えが出ないことが、逆にいうと大きな答えになるのではないか。詭弁でいうのではない。真面目な話、そうなのである。

文化庁で行つている「青少年芸術劇場」「こども芸術劇場」が、十五年間続けてきて、その間、基本的にすぐれた事業とされてきたのは、次々と、翻訳劇が続いていた。創作劇でも繰り返すに備する名作は、なんでも繰り返すのがいいというのがわたしの考え方である。

「ブンナよ木から下りてこい」は、俳優はたいへん重労働だが、一座は十七、八人ですむ。これまでも五チームにバトン・タッチしてきた作品である。これを年中巡演できるように拡充するといふ考え方はできないか。日本の古典である歌舞伎・文楽・能にしても、小編成で一年中いつでもどこかで公演するくらいの啓蒙は必要ではないか。

例えば、一回千人動員して一カ月で三万人、一年で三十六万人。次々に育ってくる青少年の世代がわりを考えにいれると、常時繰り返しても、まだ全員が文化の恩恵に浴することができるといふか。

そう考えてくると、夏の恒例行事という限定の仕方は、正しくはない気もする。

男鹿は、終演の頃には台風一過、すっかり晴れ上つていた。

「見られなかった子は、残念がるでしょうよ」と館長はいった。三々五々散つていった子の表情には満足感があつた。

文化の普及は、芸術とのふれあいは、送り手の大きな犠牲によつて成り立っている。その受け手がまったく関知しなくても、やはり犠牲は払われなければならないものだ、という実感を改めもつたのである。

の日本を担う若い世代に、芸術を鑑賞する心の豊かさを植えつける仕事が大切だと認識されているからにはほかならない。

こどもや学生たちにそんな「意識」はなくていい。むしろ、あつたらおがしいくらいのものだ。面白い、楽しい、美しいモノに接して、時間を芸術のなかに体をあずけるといったことでもいいわけだ。その体験が、やがて成人した晩に、過去の好ましい記憶として甦つてくれば、成果があつたといふことができるのである。

わたし自身、小学校時代に学校から引率されていったのはベルリン・オリンピックの記録映画ぐらいのものであった。第二次大戦が小学校(当時は国民学校と呼んでいた)時代だったわたしの幼い頃にくらべると、今の子は幸せだ。そして、贅沢だ。全国いたるところに設備のいい会館があつて、居ながらにして東京からやってきた一流の芸術がみられるのだから、台風のなかを傘もさせずに(ささずに、ではない)濡れ風になつてくる生徒は、その幸さより待たぬののほうがより大きいのではないかと考えると、幸運であつたといえる。

ことしの「青少年芸術劇場」と「こども芸術劇場」の詳細については、五月号に記載されているから繰り返さない。おおもむね、各ジャンルの名作・名曲が選ばれている。それでいいのだと思う。「芸術」という言葉はいかめしいが、じつは誰れ彼れとなく親しめる要素がなければ

編集後記

○芸術の秋を彩るさまざまな芸術文化関係の行事が各地で開催されています。文化庁主催の恒例の芸術祭は十月一日に開幕しましたが、今年は主催公演四種目十公演、協賛公演五種目二十四公演、参加公演となっています。

文化庁では、優れた芸術鑑賞の機会を充実し、青少年の情操の醸成と芸術活動への参加の気運を醸成するため、全国各地に一流の水準にある舞台芸術を派遣して、青少年芸術劇場（十四歳～十九歳対象）、こども芸術劇場（六歳～十三歳対象）を開催しています。

幸いにも、この事業は関係者の御協力により好評を得ていますが、企画委員でもあり、各地の公演で解説講師をお願いしている舞踊評論家の福田一平氏、演劇評論家の藤田洋氏のお二人に、今年度の公演の模様などを書いていただきました。

(〇)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課
TEL(〇三三)六八一二四二(代表)

「文化庁月報」十月号

(通巻第一五七号)
昭和56年10月25日印刷・発行

編集文化庁

〒100 東京都千代田区霞が関3丁目2番2号
発行所 株式会社 きょうせい

本社 〒100 東京都中央区銀座7丁目4番12号

営業所 〒100 東京都新宿区西五軒町52番地

電話 (〇三三)六八一二四二(代表)

振替口座 東京 九一六一番
印刷所 (株)行政学会印刷所

定価 一八〇円(送料四五円)
年間購読料 二、一六〇円(送料共)